

食卓が

勉強机



吉村 幸代

を並べよう。そして、それを眺めながら暮らして、一冊ずつ読んでは故人を偲んでみたいと思ふ。暮れのことだった。

義父は旧日本陸軍軍医中佐として、ビルマ(現ミャンマー)で七年の歳月を送った人である。厳格で曲がったことが大嫌い、知識欲旺盛なインテリだった。早くに両親を亡くし、新潟大

掘って立て小屋で、中はまるで地獄絵巻。わしが『天皇陛下から賜った見舞いの花だ』と言つて、白い手袋をはめた手で菊の花をかざすと、ぐったりと横たわっていた兵隊たちが最終最後の力を振り絞って起き上がり、手を合わせて拝むんだよ。かさかさ乾いて枯れて、茶色に変色した白菊。ああ、どこから誰が採って来たのやら、素性も分からない花をだよ。

戦場の白菊

七年前に他界した義父の遺品を整理した。あらかたの物は処分したり、人にあげたりして、

段ボール数箱分の書籍が残った。『戦火の記憶』『帝国陸軍の本質』『ビルマの地獄戦』『死守命令』……大半が第二次世界大戦の戦記物である。

書棚は限られている。かと言って、箱に入れたまま物置にしまい込またくもない。この書物の山をどうしたものか。考えあぐねた末に私は、自分の愛読書を大量処分することにした。居間の本棚には、義父の形見の本

学医学部で苦学するうちに開戦。「どうせ戦争に駆り出されるなら出世の道をという思いを、学費免除の魅力が後押しして、市ヶ谷の軍医学校に入っ

た。陸軍の男、妾になったというわけさ」と苦笑していた。

「戦争も終盤に近づくと、恐ろしい有様だった。ジャングルの中で、水溜りの泥水まで飲んで、水溜りの泥水まで飲んで、思つよ」。義父の話は続いていた。

た。陸軍の男、妾になったというわけさ」と苦笑していた。

「そんなある日、わしは飛行機に乗るように言われた。天皇陛下が送って下さったという白菊を持って、窓のない飛行機で

「残された私たちは、戦争体験をどうやって語り継いでいったら良いのでしょうか」。

も夏が来ると時折、大戦の話題を出した。私に向かって「戦後

院。病院と言っても悪臭の漂う

(寿台公民館長・主婦川松本)

リレーコラム